

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K00871

研究課題名(和文)ペアリハーサルとピアレビューを用いた英語対話能力育成プログラムの開発と効果検証

研究課題名(英文) Research on the Development of a Method Promoting English Communication Ability Using Pair Rehearsal and Peer Review

研究代表者

長崎 睦子 (Nagasaki, Mutsuko)

愛媛大学・教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：90406546

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、3年間の研究期間で次のことを明らかにした。(1)ペア(インタラクティブ)・リハーサル、個人リハーサル共に、リハーサル回数が増えれば増えるほど、英語コミュニケーション・テストの点数が伸びる傾向にあり、特に、個人リハーサルは、「考えや意見を述べる能力」と「語彙力」の向上に、ペア・リハーサルは、「会話を始め閉める能力」の向上に効果がある；(2)個人またはペアによるどちらか一方のリハーサルだけであっても、繰り返しそのリハーサルに取り組むと、会話テスト、スピーチテストの両方においてスピーキング力が向上する；(3)個人レビューとピア・レビューは、スピーキングの異なる要素に学習者の注意を向ける。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は次の3点にまとめられる。

(1) 授業活動とそのリハーサルを有機的に組み合わせることで、授業外での英語コミュニケーション活動の機会を着実に増やすことができた。(2) 繰り返し口頭リハーサル(ペアリハーサルおよび個人リハーサル)に取り組めば取り組むほど、会話テストの点数が向上する傾向にあることが分かり、日本においても英語コミュニケーション力を向上できる学習法を提示できた。(3) 英語コミュニケーション能力を測る手段として、ループリックを使った信頼性と妥当性の高い評価法を確立できた。

研究成果の概要(英文)：Our three-year Kaken project regarding oral rehearsals revealed: (1) Both types of rehearsals, pair (interactive) rehearsals and individual rehearsals appear to promote learners' communication ability. Specifically, the more students engage in interactive rehearsals, the more likely they are to improve their scores of greetings and closings, as well as attitude, whereas the more they engage in individual rehearsals, the more likely they are to improve their scores in expressing ideas and vocabulary.; (2) Doing only one type of rehearsal can, not only promote L2 proficiency in a similar task (monologic rehearsal improved monologic speeches; pair rehearsal improved pair conversation), but also in a different task type (monologic rehearsal improved pair conversation; pair rehearsal improved monologic speeches).; (3) Individual review and peer review immediately after speaking encourage L2 learners to notice different aspects of language.

研究分野：英語教育

キーワード：Interactive Rehearsal Individual Rehearsal Peer Review Noticing

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

グローバル社会に必要な英語コミュニケーション能力の育成には、多量のインプット（聞く、読む）とアウトプット（話す、書く）が重要である。しかし、日本のような日常生活で英語に触れる機会がほとんどない環境では、いかに学習者の日常の英語使用の機会を増やすかが大きな課題である。その課題に取り組むべく、本研究者は、国立大学1年生の必修英語科目、スピーキング・クラスを対象に、授業ではスピーチ（成果発表）を定期的に行い、授業外ではそのスピーチに向け、原稿を書かずに口頭でリハーサル（練習）をする「スピーチ&リハーサル」法を提案し、その効果を3年間にわたり検証してきた（基盤研究C 15K02681『英語スピーキング能力を伸ばす授業法：その指導法と評価の可視化に関する実証的研究』2015～2017年）。検証の結果、口頭リハーサルは学習者の第二言語（L2）への気づきや自己修正を促進し、リハーサルをすればするほど、スピーキング力が向上することが実証された。しかし、その効果は、スピーチ・テストやナラティブ・テストなどの、個人で行うモノローグ・タスクで検証されたものであり、対話者とのコミュニケーションにおいてどのような効果をもたらすかは明らかにされていない。したがって、本研究は次の段階へと進み、ペアで行うインタラクティブなリハーサルを個人リハーサルと組み合わせることにより、リハーサル法を発展させ、大学生の会話力、ディスカッション力、スピーチ力の向上を目指した。

## 2. 研究の目的

本研究は、グローバル社会で活躍できる大学生の育成を目標に、主に、その基盤のひとつとなる英語コミュニケーション基礎力を確実に身につけさせる指導法とその効果を測定する評価法を確立することを目指した。さらに、その指導法および評価法の枠組みを基に、現代の社会的諸問題について議論できる英語の発展的対話能力の育成も図った。その実現のために、次の3つのプロジェクトを実施した。

① 授業（会話やスピーチの発表）と授業外学習（ペアや個人でのリハーサル）を有機的に結び付けた英語コミュニケーション能力を育成する学習指導方法の実践と改善

英語コミュニケーション能力を評価するための独自のスピーキング・ルーブリックの作成と改善：より妥当性・信頼性の高い評価法の確立

英語習熟度の高いクラスでの発展的取り組みの実践：ディスカッション能力の育成

## 3. 研究の方法

### 3.1 リハーサル

3年間のプロジェクト期間を通して、大学生の英語スピーキング力向上を目的に、英語クラスに2種類のリハーサル法を取り入れた。

(1) ペア（インタラクティブ）・リハーサル：授業でのペアによる約5分間の会話発表に向け、自宅では原稿を書かずにパートナーと繰り返しリハーサルをする。

(2) 個人リハーサル：a. 授業でのペアによる約5分間の会話発表に向け、自宅では原稿を書かずにひとりで繰り返しリハーサルをする。会話で自分が話したい内容や相手への質問、挨拶などを練習する。b. 授業での約2～3分間のスピーチ発表に向け、自宅では原稿を書かずにひとりで繰り返しリハーサルをする。

### 3.2 スピーキング評価ルーブリック

3年間のプロジェクト期間を通して、大学生の英語スピーキング力を評価するために、3種類のルーブリックを作成した。

(1) 会話評価ルーブリック：6観点（[[会話を挨拶で始め閉める][意見を述べる][質問をする][語彙][会話の流れ][態度]）と5段階からなる評価ルーブリックを作成した。

(2) ディスカッション評価ルーブリック：6観点（[[意見を述べる（量）][意見を述べる（質）][産出（発音・流暢さ）][会話の流れ][語彙][態度]）と5段階からなる評価ルーブリックを作成した。

(3) スピーチ評価ルーブリック：2015～2017年の研究で作成したスピーチ評価ルーブリックを基に、6観点（[[語彙][発音][流暢さ][内容・構成][文法][態度]）と5段階からなる評価ルーブリックを作成した。

### 3.3 2つ教室研究

2つの教室研究を通して、上記2種類の「リハーサル」法の効果を検証した。また、会話発表ルーブリック、ディスカッション評価ルーブリック、スピーチ評価ルーブリックの開発・改善を行った。各研究の参加者及び主なリサーチ・クエスチョン（RQ）は次の通りである

#### (1) 教室研究1(2018年)：

a. 参加者：参加者は、大学1年生の英語スピーキング2クラスを履修する60名の学生であった。それぞれ、リハーサル強制グループ（Compulsory Rehearsal=CR, 28名）とリハーサル自由グループ（Free Rehearsal=FR, 32名）に分けられた。両グループの学生は、学期中に全5回の会話

発表をした。毎回、会話のトピックとパートナーは異なった。CR グループの学生は、1 つの会話発表に向け、授業外では、ペアで行う約 5 分間のインタラクティブ・リハーサルを 2 回以上、ひとりで行う約 2 分間の個人リハーサルを 5 回以上行うことが課題とされた。したがって、コースを通して、合計 10 回以上のペア・リハーサルと 25 回以上の個人リハーサルに取り組むことが求められた。リハーサルの回数は、課題点として成績評価に加えられた。一方、FR グループの学生は、CR グループと同様に、学期中に授業で全 5 回の会話発表をした。会話発表に向け、ペア・リハーサルと個人リハーサルに取り組むよう勧め、動機づけを行ったが、リハーサルするかどうかは自由であり必須課題ではなかった。

#### b. リサーチ・クエスチョン

RQ1：学習者は、ペア・リハーサル、個人リハーサルを通して、第二言語の何に気づくか

RQ2：ペア・リハーサルと個人リハーサルは、英語会話力を向上させるか

### (2) 教室研究 2 (2020 年)

a. **参加者**：参加者は、大学 2~4 年生の「ディスカッション・スキル」、「オーラル・パフォーマンス」クラスのいずれかまたは両方を受講した計 24 名であった。次の 3 つのグループに分けられた：ペア・リハーサル・グループ (Pair Rehearsal=PR, 13 名)、個人リハーサル・グループ (Individual Rehearsal=IR, 6 名)、ペアおよび個人リハーサル・グループ (Pair and Individual Rehearsals=PIR, 5 名)。PR グループは、ディスカッション・スキルクラスのみを履修した学生で構成され、このクラスでは、学期中に授業で計 5 回の会話発表を行った。毎回、会話トピックとパートナーは異なった。授業外では、各発表につき、ペアで約 5~6 分間のインタラクティブ・リハーサルを 4 回以上行うことが課題であった。したがって、合計 20 回のペア・リハーサルに取り組んだ。IR グループは、オーラル・パフォーマンスクラスのみを履修した学生で構成され、このクラスでは、学期中に授業で計 5 回のスピーチ発表を行った。スピーチのトピックは、PR グループの会話トピックと同じであった。授業外では、各発表につき、ひとりで約 2~3 分間の個人リハーサルを 8 回以上行うことが課題であった。したがって、合計 40 回以上の個人リハーサルに取り組んだ。PIR グループの学生は、ディスカッション・スキルとオーラル・パフォーマンスの両クラスを履修したため、教室での会話発表に向けたペア・リハーサルと、スピーチ発表に向けた個人リハーサルの両方に取り組んだ。したがって、合計 20 回以上のペア・リハーサルと 40 回以上の個人リハーサルに取り組むことが課題であった。

#### b. リサーチ・クエスチョン

教室研究 1 では、参加者は、同じ期間中に両タイプのリハーサル (ペア・リハーサルと個人リハーサル) に同時に取り組んだため、ペア・リハーサルにのみ取り組んだ場合の効果、個人リハーサルにのみ取り組んだ場合の効果は、明らかになっていない。したがって、より厳密に両タイプのリハーサルの効果を調査するため、教室研究 2 では次のリサーチ・クエスチョンを立てた。

RQ1：口頭リハーサルは英語ディスカッション力を向上させるか

a. ペア・リハーサルのみへの取り組みは、英語ディスカッション力を向上させるか

b. 個人リハーサルのみへの取り組みは、英語ディスカッション力を向上させるか

c. ペア・リハーサルと個人リハーサルの両方に取り組んだ場合は、どちらか一方のみより、英語ディスカッション力を向上させるか

RQ2：口頭リハーサルは英語スピーチ力を向上させるか

a. ペア・リハーサルのみへの取り組みは、英語スピーチ力を向上させるか

b. 個人リハーサルのみへの取り組みは、英語スピーチ力を向上させるか

c. ペア・リハーサルと個人リハーサルの両方に取り組んだ場合は、どちらか一方のみより、英語スピーチ力を向上させるか

さらに、教室研究 1 で集めたノートやアンケート結果から、学習者は、ペア・リハーサルは、ひとりで取り組む個人リハーサルに比べ、ひとりでは気づかない問題に気づかせてくれるため、より効果的だと思っていることが分かった。これは、学習者同士がお互いにアドバイスをするピア・レビュー (peer-review) が、L2 学習に有益である可能性を示唆している。以上から、教室研究 2 では次のリサーチ・クエスチョンも立てた。

RQ3：学習者は、ピア・レビュー (クラスメートから、自分のパフォーマンスに対するフィードバックをもらい振り返りをする) と個人レビュー (自分のパフォーマンスを自分で振り返る) を通して、第二言語の何に気づくか

## 4. 研究成果

### 4.1 教室研究 1 (2018 年):

(1) RQ1：学習者はペア・リハーサル、個人リハーサルを通して、第二言語の何に気づくか

本研究では、ペア・リハーサルおよび個人リハーサルの直後に、学習者に、言語や会話について気づいたことをノートに記してもらった。その結果、次のことが分かった：(1) ペア・リハーサル直後に合計 865 の何らかの言語項目についての記述があり、1 人平均 14.4 の問題に気づいていた、(2) 個人リハーサル直後には、合計 919 の言語項目についての記述があり、1 人平均 15.3 の問題に気づいていた。このように、ペア・リハーサルも個人リハーサルも、気づきの頻度はほ

ば同じであったが、問題があると気づいた項目に違いがあることが分かった。ペア・リハーサルでは、相手話者が関わる項目に対する気づきが多かった。例えば、挨拶、ペアで話す内容、質問をする、聞き手の表現、非言語コミュニケーション要素、意味交渉、会話の基本構造、トピックを変えるなどである。個人リハーサルでは、個人で練習できる項目への気づきが多く見られた。例としては、自分が話す内容、間を埋める表現、語彙、発音、文法、流暢さがあげられる。

## (2) RQ2: ペア・リハーサル, 個人リハーサルは, 学習者のコミュニケーション力を向上させるか

リハーサルが強制であった CR グループ, リハーサルが自由であった FR グループともに, 事前テストから大きく点数を伸ばした (表 1)。さらに重回帰分析を用いて 3 つの項目: クラスの種類 (CR または FR—リハーサルが強制であったか自由であったか), 各学生のペア・リハーサルの回数, 各学生の個人リハーサルの回数, とテストの伸びの関係を調査した (表 2)。その結果, 3 項目すべてがテストの点数の伸びを予測する因子であることが分かった (クラスの種類:  $\beta = -.69, p < .01$ , ペア・リハーサル:  $\beta = .37, p < .05$ , 個人リハーサル:  $\beta = .39, p < .05$ )。したがって, ペア・リハーサル, 個人リハーサルともに, リハーサルをすればするほど, 学習者のコミュニケーション力が向上する傾向にあることが分かった。

表 1. 会話テストの結果

	pretest		posttest	
	M	SD	M	SD
All (N=60)	15.4	3.2	20.5	3.0
CR (n=28)	16.5	3.1	20.8	2.2
FR (n=32)	14.4	3.0	20.3	3.6

Note. 最高点=30 点; M = mean; SD = standard deviation.

表 2. 会話テストの重回帰分析結果

Independent Variable		Unstandardized Coefficient B	SE	Standardized Coefficient $\beta$	t	Sig.
Test	Class Type (CR or FR)	-4.54	0.99	-.69	-4.56	0.000**
Score	Frequency of Interactive Rehearsals	0.43	0.17	.37	2.49	0.0155*
Changes	Frequency of Individual Rehearsals	0.13	0.06	.39	2.15	0.0356*

Note. B = regression coefficient;  $\beta$  = standardized partial regression coefficient; SE = standard error; Sig. = significance. \* $p < .05$ . \*\* $p < .01$ .

さらに, 上記 3 つの項目と会話評価ルーブリック 6 観点 (3.2(1) 参照) における点数の伸びとの関係を, 重回帰分析にて検証した。6 観点の中で「質問をする」以外の 5 観点の F 値は有意であったため分析を進めた。その結果, クラスの種類 (CR または FR) は, 次の 5 観点の伸びを予測する因子であることが分かった (会話を挨拶で始め閉める:  $R^2 = .189, \beta = -.44, p < .01$ ; 意見を述べる:  $R^2 = .198, \beta = -.36, p < .05$ ; 語彙:  $R^2 = .156, \beta = -.53, p < .01$ ; 会話の流れ:  $R^2 = .208, \beta = -.67, p < .01$ ; 態度:  $R^2 = .273, \beta = -.69, p < .01$ )。またペア・リハーサルは, 「会話を挨拶で始め閉める」 ( $R^2 = .189, \beta = .50, p < .01$ ) と「会話への態度」 ( $R^2 = .273, \beta = .36, p < .05$ ) の 2 項目において, 点数の伸びを予測する因子であることが分かった。一方, 個人リハーサルは, リハーサルの回数がふえるほど, 「意見を述べる」と ( $R^2 = .198, \beta = .39, p < .05$ ), と「語彙」 ( $R^2 = .156, \beta = .57, p < .01$ ) の点数が伸びる傾向にあることが分かった。

## (3) まとめと考察

ペア・リハーサル, 個人リハーサル共に, リハーサル回数が増えれば増えるほど, 英語会話テストの点数が伸びることが分かった。具体的には, ペア・リハーサルは, ルーブリック観点の会話を挨拶で始め閉めるスキルと会話への態度の向上に効果があり, また, 個人リハーサルは, 考えや意見を述べる力と語彙力の向上に効果があることが明らかになった。さらに, 興味深いことに, 学習者が向上を示した項目は, 彼らがリハーサルを通して気づいた項目と一致していることが分かった。具体的には, ペア・リハーサルは, 相手話者が関わるコミュニケーション要素 (例: 挨拶) やアイ・コンタクトなどの非言語コミュニケーション要素に学習者の注意を向け, 個人リハーサルは, メッセージの意味 (例: 個人の内容, 語彙) に学習者の注意を向けていた。このことから, 学習者が気づいた項目がより伸びる傾向にあると考えられる。最後に, ペア・リハーサルと個人リハーサルは, それぞれ言語の異なる要素に学習者の注意を向けることから, コミュニケーション能力の向上には, 両タイプのリハーサルに取り組むことが重要であろう。

## 4.2 教室研究 2 (2020 年):

### (1) RQ1: 口頭リハーサルは英語ディスカッションを向上させるか

表 3 は、会話 (ディスカッション) の事前・事後テストの結果を表している。二要因の分散分析 (混合型) (two-way mixed ANOVA) によって分析した結果、リハーサルのタイプ (ペア・リハーサルのみ (PR), 個人リハーサルのみ (IR), 両方のリハーサル (PIR)) に主効果は認められなかった。一方で、事前・事後テストに関しては主効果があり ( $F(1, 21) = 47.90, p < .01, \eta^2 = .70$ ), 事前から事前テストに向け点数が伸びたことが認められた。つまり、PR, IR, PIR は、ディスカッション・テストにおいてほぼ同等の効果があつたと言える。したがって、RQ a. 「ペア・リハーサルは、英語ディスカッション力を向上させるか」と b. 「個人リハーサルは、英語ディスカッション力を向上させるか」は支持され、c. 「ペア・リハーサルと個人リハーサルの両方に取り組んだ場合は、どちらか一方のみより、英語ディスカッションを向上させるか」は支持されなかった。これは、スピーチに向けた個人リハーサルのみに取り組んでも、英語ディスカッション力の向上に貢献することを示唆している。

### (2) RQ2: 口頭リハーサルは英語スピーチ力を向上させるか

表 4 は、スピーチの事前・事後テストの結果を表している。二要因の分散分析 (混合型) (two-way mixed ANOVA) によって分析した結果、リハーサルのタイプ (ペア・リハーサルのみ (PR), 個人リハーサルのみ (IR), 両方のリハーサル (PIR)) に主効果は認められなかった。一方で、事前・事後テストに関しては主効果があり ( $F(1, 21) = 56.31, p < .01, \eta^2 = .73$ ), 事前から事前テストに向け点数が有意的に伸びたことが分かった。よって、PR, IR, PIR は、スピーチ・テストにおいてほぼ同等の効果があつたと言える。RQ a. 「ペア・リハーサルのみへの取り組みは、英語スピーチ力を向上させるか」と b. 「個人リハーサルのみへの取り組みは、英語スピーチ力を向上させるか」は支持され、c. 「ペア・リハーサルと個人リハーサルの両方に取り組んだ場合は、どちらか一方のみより、英語スピーチ力を向上させるか」は支持されない結果となった。これは、パートナーとの対話に向けたペア・リハーサルのみに取り組んでも、英語スピーチ力の向上に効果があることを示している。

表 3. ディスカッション・テストの結果

	Pretest		Posttest	
	M	SD	M	SD
PR (n=13)	20.6	3.3	24.2	3.0
IR (n=6)	22.1	2.3	26.4	1.8
PIR (n=5)	19.6	2.1	23.2	1.8

表 4. スピーチ・テストの結果

	Pretest		Posttest	
	M	SD	M	SD
PR (n=13)	20.2	2.8	22.4	3.0
IR (n=6)	20.2	3.4	22.5	3.4
PIR (n=5)	18.0	1.8	22.2	2.0

Note. Maximum score was 30 in both tests; M = mean; SD = standard deviation.

### (3) RQ3: 学習者は、ピア・レビューと個人レビューを通して、第二言語の何に気づくか

会話発表へのピア・レビューは、非言語的要素 (例: non-verbal cues, 声) に学習者の注意を向け、スピーチ発表に向けたピア・レビューは、非言語的要素と内容の両方に注意を向けていた。

### (4) まとめと考察

会話テスト、スピーチ・テストにおいて、グループ間 (PR, IR, PIR) に主効果は見られなかったが、事前テストから事後テストの伸びに関しては、グループ内で主効果があつた。したがって、ペア・リハーサル、個人リハーサル、両タイプのリハーサルはほぼ等しく会話テストおよびスピーチ・テストにおけるスピーキング力の向上に貢献したと言えるだろう。また、会話評価ルーブリックの 6 つの項目に関しては、個人リハーサル (IR) は、ペア・リハーサル (PR) や両タイプのリハーサル (PIR) に取り組んだ場合より、学習者のスピーキング量を増やすことが分かった。教室研究 2 の全結果をまとめると、(1) スピーチに向けて個人でするスピーキング練習 (個人リハーサル) は、コミュニケーション能力の向上を促す、(2) 会話発表に向けパートナーとするスピーキング練習 (ペア・リハーサル) は、スピーチ能力の向上を促す、(3) どちらか一方のリハーサルへの取り組みは、両タイプに取り組んだ場合と同等の効果がある、(4) スピーチに向けて個人リハーサルを行った場合は、会話におけるスピーキング量を増やす、(5) 個人レビューは学習者の会話やスピーチの内容への意識を高め、一方、ピア・レビューは、表情や声のトーンなどのいかにメッセージを伝えるかという非言語コミュニケーション要素に、より学習者の意識を高める傾向にあることが分かった。以上から、英語コミュニケーション力およびスピーチ力の向上には、たとえどちらか一方のリハーサル (ペア・リハーサルまたは個人リハーサル) であっても、多くのリハーサルの機会を学習者に与えること重要だと考えられる。また、個人での振り返りおよびピア・フィードバックを通じた振り返りは、学習者に、スピーキング力向上に重要な異なるポイントに気づかせてくれるため、個人レビュー、ピア・レビューの両方を行う機会を学習者に与えることが肝要であろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Nagasaki, M., Armitage, K., and Orimoto, S.	4. 巻 (online)
2. 論文標題 The Benefits of Interactive and Individual Rehearsals for Developing Second Language Communicative Ability	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 RELC Journal	6. 最初と最後の頁 (online)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/0033688220901348	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Nagasaki, M., Orimoto, S., & Armitage, K.	4. 巻 16
2. 論文標題 The contribution of noticing and self-modification through repetitive oral output to second language learners' monologic speaking performances	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JACET Chugoku-Shikoku Chapter Research Bulletin	6. 最初と最後の頁 103-120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Nagasaki, M.	4. 巻 13
2. 論文標題 The effect of rehearsal period length on second language speaking improvement	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Theory of Information Culture	6. 最初と最後の頁 78-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Armitage, K.	4. 巻 17
2. 論文標題 Enhancing Japanese university students' English engagement and speaking proficiency using smartphones	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Faculty and Staff Development in Higher Education	6. 最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Nagasaki, M., Orimoto, S., & Armitage, K.
2. 発表標題 How do oral rehearsals affect presentation and discussion skills in English?
3. 学会等名 RELC第55回国際学会（Online）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長崎睦子・折本素
2. 発表標題 大学英語スピーキングクラスにおけるコミュニケーション能力育成のための
3. 学会等名 JACET中四国秋季支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nagasaki, M., Orimoto, S., & Armitage, K.
2. 発表標題 Benefits of Interactive and Individual Rehearsals for Developing Second Language Communication Ability
3. 学会等名 JACET第58回国際学会（名古屋）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Armitage, K., & Nagasaki, M.
2. 発表標題 Japanese University Students' Use of Digital Technology and Learning Preferences
3. 学会等名 RELC第54回国際学会（シンガポール）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	折本 素  (Orimoto Sunao)  (20194649)	愛媛大学・教育・学生支援機構・教授   (16301)	
研究 分担者	ARMITAGE KRISTIN  (Armitage Kristin)  (70765809)	愛媛大学・教育・学生支援機構・助教   (16301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------